

「恐ろしい天命の仕打ちだな。龍介がこちらへ向かっていて、誠吾は伊豆大島へ上陸……。何ということだ」

「ここへ来るのは時間の問題だと思われます。もつとも、今日は休診日ですので、診療所は表向き閉まっていますが」

「桐島診療所の看板は？」

「かかっています」

「そこに高嶺真澄の名前は？」

「書かれています」

「そうか」

「教授」

桐島は掌にじっとりと汗をかいていた。受話器が滑り落ちそうになる。

「私はどうするべきでしょうか」

「私がきみの立場なら、会わない選択をするだろう」

桐島は心底ほっとした。

魂が惹き合いながらすれ違ふ。まだ出逢う時期ではないのだと思いたかった。

「判りました」

「どこか物陰から診療所の入口を窺える場所はあるかね？」

「はい。紫陽花の垣根へと続く中庭から」

梅雨をひと月も過ぎた今も、桐島の手入れする紫陽花はその繊麗な姿で診療所を訪れる人々を魅了し続けている。

「そこは時空が歪んでいる。誠吾からはきみの姿は見えないよ」

ほっほという笑い声が聴こえる。桐島は受話器を握りしめた。

「どういふことですか？」

「二階堂修哉が現れたときのことを話してくれたらどう？」

「はい」

桐島は思い出した。そうだ。修哉の幻覚を見たのはまさにあの場所からだった。

「私は医局の隅にしていることにしよう。覚えているかね？」

忘れるはずがなかった。並行世界、膠芽腫に侵された自分が修哉の幻影を求めて訪れた医局で、脳神経外科医だった高嶺真澄と出会った場所。それまで気にしたことのない高嶺の存在が急に浮き彫りになったのは、彼が時空の狭間に身を隠していたからなのか。

「私の脳内で今、これまでに辿って来た様々な事象が繋がろうとしています」

「私もだよ、桐島くん。もう一息。あともう一息で、彷徨える魂たちの伽陀を祓ってやることができる」
伽陀。

桜の話をしなければならぬ。

「先日、教授との電話を終えた後にふと八重桜のことを思い出したのです」

「八重桜？」

「はい。私は教授を急性心不全で喪ったあと、膠芽腫で世を去りました。その直前に私を引き取り面倒を見てくれたのは高嶺真澄です。もちろん、龍介ではなく、龍介と修哉の記憶媒体の」

「私の愛弟子だった男だよ」

勝又の声が懐かしむように和らいだ。

「可哀想に。自分が記憶の貯蔵庫でしかないと知ったときの顔といったら……。そうか。きみは真澄に看取られたのだね」
「はい。根津の屋敷で。並行世界での二階堂修哉の自宅です。その庭に大きな八重桜がありました。私はその桜と重なるようにして、別の八重桜を見たのです。樹齢何百年とも思われる大木です。花弁は桜というよりはまさに血の色をして……もちろん幻覚ですが。それが低く枝を伸ばし、修哉の首を絡め取ろうとするのです」

勝又は無言でいる。息が若干荒い。

「教授？ どうされました？」

「繋がったかもしれないよ桐島くん」

地を這うような低い声が聴こえ、桐島はぞっとした。

「え？」

「それは八重比丘尼だ。賢吾がこの世で死の六ヶ月前に話していった。今年は八重比丘尼が咲いた、だから私は今年中に決着をつけなければならぬ、と。それに、誠吾も八重比丘尼の話をしておったのだ。私にはその頃桜の幻姿が見えていたのだが……。そうか、やはりあの桜だったか」

桐島は目を見開いたまま勝又の声を聴いていた。

「並行世界では、修哉が殺害された一九九〇年に八重比丘尼は咲き、その次に開花したのは、賢吾が自害した二〇一二年。そして現時空でもやはり彼らの死に際し、桜は花をつけた。修哉が殺された一九七七年、そして賢吾が自殺した一九九九年。誠吾が山梨で縮小版を調べたそうだよ。その他の年は一度も開花していない」

その桜が伽陀の根源だとしたら。

「教授……」

「桐島くん」

勝又の力強い声が耳に響いた。

「山梨へ行かなければならないかもしれない」